

後書き
～七つ森・いきものがたり～

◆プロローグ

知輝 斉藤先生じゃないですか。

斉藤 (あっ)知輝くん。どうしたの。

知輝 えっと、その一、下見なんです。

斉藤 下見？七つ森を？

知輝 あの、今日の午後、ここで会う約束をしてるんです。

斉藤 会うって、智花さんと。

知輝 (あっ)はい。七つ森を案内してほしいって頼まれちゃって。

斉藤 それで下見をしてるんだ。知輝くんらしいね。

知輝 斉藤先生は何をしてるんですか。

斉藤 創作活動。

知輝 森で創作活動ですか？

斉藤 書斎でパソコンに向かっていたら行き詰まっちゃってね。そんなときは森に出かけて、森の生き物との出会いを楽しむことにしてるんだ。

知輝 生き物との出会いを…

斉藤 生き物との出会いが、脳を活性化させてくれるんだ。

知輝 先生は、どんな生き物が好きなんですか。

斉藤 草花、樹木、鳥、昆虫、最近はキノコやクモにも興味を持ってね。何でもオッケーって感じかな。(あっ)もちろん人間もその中に含まれるよ。

知輝 人間も？

斉藤 僕は人間に興味があるから、演劇を通して人間を描いているんだ。とにかく七つ森は僕をときめかせてくれる生き物でいっぱいなんだ。

知輝 七つ森は先生の発想の泉なんですね。

斉藤 僕のすべての作品がこの七つ森で生まれたって言っても言い過ぎじゃないと思う。

知輝 今はどんな作品を創っているんですか。

斉藤 それがね、今創ってるのは新しい劇じゃなくて、後書きなんだ。

知輝 後書き？

斉藤 今度、『七つ森～シリーズ・七つ森の子どもたち～斉藤俊雄作品集2』が発売されるんだけど、その後書きの構想がどうしても浮かんでこなくて。

知輝 その作品集にはどんな作品が収録されるんですか。

斉藤 作品集のタイトルになった『七つ森』、それと『ザネリ』『怪談の多い料理店』『魔術』『森の交響曲』そして、君の登場する『とも』。

知輝 (あっ)僕それ全部読みました。暗記するくらい。

斉藤 そうなんだ。知輝くんはどれが一番好き。

知輝 ぜ…全部です。

斉藤 知輝くんらしい答えだね。

知輝 ほ、ほんとに全部好きなんです。先生、先生がどんな思いで七つ森シリーズを創っているか僕に教えてくださいませんか。童話作家になるための参考にしたいんです。

斉藤 童話作家か。わかった。それじゃ七つ森を散歩しながら話そうか。七つ森の下見もかねて。

知輝 いいんですか。ありがとうございます。

◆オオルリ そして『七つ森』

斉藤 知輝くん、耳を澄ましてごらん。

知輝 …

斉藤 ほら、この鳴き声。

知輝 …

斉藤 チーロールーリー・ジジッって聞こえない。

知輝 聞こえます。

斉藤 オオルリのきえず囀り。

知輝 (あーっ)『七つ森』で隼人くんと友達になった、

斉藤 ほら、あの木の梢のところ。

知輝 (あっ)あれですね。

斉藤 この双眼鏡を使って見てごらん。

知輝 (わー)背中が真っ青。

斉藤 僕が鳥に興味を持ったとき、一番のあこがれだった鳥がこのオオルリだった。初めて出会えたときの興奮は今でも忘れない。

知輝 『七つ森』はそんな自然の素晴らしさを観客に訴える作品ですね。

斉藤 観客というよりも、本音を言うと部員なんだけどね。

知輝 部員なんですか。

斉藤 もちろん『七つ森』を観た後、観客が自然を好きになって鳥や花に興味を持ってくれたら嬉しいよ。残念ながら、

僕の劇はそこまでの力は持ってないと思うんだ。でも、上演した部員は違う。

知輝 どう違うんですか。

斉藤 みんな本当に自然が好きになるんだ。特に鳥には夢中になる。僕はね、自然劇場と名づけた取り組みを長い間続けてるんだ。

知輝 自然劇場？

斉藤 部員と自然の劇場にお邪魔して、生の自然を体験する取り組みなんだ。『七つ森』



を上演する前にも三回出かけた。ただね、この時は上演を決めたのが秋の終わりだったんで、夏鳥のオオルリは南の国に帰っちゃって、見ることはできなかつたんだけど。でね、『七つ森』を上演した後、「ルリに会いに行く」というサブタイトルをつけた自然劇場を日光で開催したんだ。うれしいことに全員がオオルリに出合えた。その時の興奮は、あこがれのスターに出会った時と同じなんだ。

知輝 オオルリがあこがれのスター、それ、いいですね。

斉藤 僕はそんな現代のすてきな子ども達を『七つ森』で描きたかった。

知輝 彼らは失敗ばかりしますね。

斉藤 そんな失敗することも含めて子ども達って魅力的なんだよね。

知輝 『七つ森』の登場人物は先生の他の作品にも登場してますよね。

斉藤 「『シリーズ七つ森の子ども達』に登場した人物大集合！」みたいな作品にしたかったんだ。

知輝 主人公ハヤト役の隼人くんは『ザネリ』の主人公ですよ。『ザネリ』で五年生だった隼人くんは六年生になったんですね。でも相変わらず漢字は苦手です。

斉藤 アメリカでの生活が長かったからね。

知輝 演出担当の岸涼子は『春一番』では中学三年生でした。同じく『春一番』からは犬田裕美が結婚して猫田裕美という名前が登場します。生徒会長だった山口恵子は三浦恵子となって名前だけの登場。瑠璃姫の海野渚は『降るような星空』、ヤブレ役の西田サチは『青空』、音響の近藤愛は『ときめきよろめきフォトグラフ』の登場人物。後これは推測なんですけど、小瑠璃の大場真樹は、『夏休み』の主人公・大場健一と関係があるんじゃないですか。

斉藤 あたり。彼とかくれんぼをしていた少女が大場真樹。彼の孫なんだ。

知輝 カブレ役の山本大輔くんがわからなかったんですけど。

斉藤 大輔くんは、これから書く劇に登場する予定。彼は未来の僕の作品の登場人物。

知輝 その作品読んでみたいです。

斉藤 さっ、七つ森公園に着いたよ。『ザネリ』で子どもたちが『銀河鉄道の夜』を練習していた場所。

知輝 公園っていうより、森の中の広場って感じですね。

斉藤 知輝くんあれ。大きな鳥が飛んでるだろ。

◆トビ そして『ザネリ』

知輝 ゆっくりと輪を描いて飛んでますね。何ていう鳥ですか。

斉藤 トビ。別名トンビ。

知輝 (あー)隼人くんがゾンビと間違えた。

斉藤 あんな大きな鳥なのに全然恐れられてないんだ。生ゴミなんか食べたりするからね。

知輝 そう言えば「鳶が鷹を生む」っていうことわざがありますね。

斉藤 トンビもタカの仲間なんだけどね。

知輝 斉藤先生はトンビって好きですか。

斉藤 もちろん好きさ。情けないと思われがちなたかも、それはそれでいいよねって。

知輝 嫌いな鳥っていないんですか。

斉藤 いないね。知輝くんはどうなの。

知輝 僕はどうもカラスが苦手です。何か意地悪な気がして。

斉藤 そんなカラスも、奥が深いんだよね。カラスは別に意地悪してるわけじゃないんだ。

知輝 意地悪っていえば、斉藤先生はザネリを意地悪な子って思わないんですね。

斉藤 ジョバンニをからかうザネリは意地悪だと思う。でもね、それがザネリのすべてだとは思えないんだ。僕は、もし僕のクラスにザネリがいてもザネリのことを嫌いにはならないっていう自信がある。『銀河鉄道の夜』に描かれた場面だけでザネリ=極悪人と考える教師に教わっている生徒ってかわいそうだと思う。だってザネリくらいの意地悪をする子って世の中にいくらでもいるだろ。それでその子の人格すべてを否定するなんてひどいと思う。僕はカムパネルラが死んでしまった後、ザネリは一生そのことを背負い続けるって思うんだ。僕は『ザネリ』でそんなザネリを描きたかった。

知輝 『ザネリ』って『夏休み』に収録されている『ときめきよろめきフォトグラフ』と重なる話ですよ。

斉藤 どこが重なってるかわかる？

知輝 隼人くんのお気に入りの鶴田美佳さんって『ときめき』の主人公・鶴田夏美さんの妹ですよ。そして、隼人くんが夏美さんの事故を目撃する。

斉藤 知輝くん、うれしいよ。本当に僕の作品をよく理解してくれてるね

◆ヒトリシズカ そして『怪談の多い料理店』

知輝 (わー) 白い花が一面に咲いてますね。何ていう花ですか。

斉藤 ヒトリシズカ。

知輝 ヒトリシズカって『怪談の多い料理店』の『静伝説』に登場する花ですね。



斉藤 スプリング・エフェメラルの仲間なんだ。

知輝 スプリング・エフェメラル？

斉藤 春の儂^{はかな}い生命^{いのち}って意味。春先の短い間現れそして消えていく。

知輝 スプリング・エフェメラル。すてきな響きですね。ところで、『怪談の多い料理店』を創ろうと思ったきっかけは何なんですか。

斉藤 僕の話をしていいのかな。『怪談の多い料理店』は白鳥ひろみくんが書いたという設定になってるけど、実際の劇を書いたのは僕だから。

知輝 お願いします。

斉藤 きっかけはディズニー映画の『美女と野獣』を観たことなんだ。ラストシーンで美女が結ばれるのは、野獣ではなくて野獣の姿をした王子様だったということに違和感を覚えたんだ。「結局外見なんだよ」って感じちゃって。僕は映画を見終わった後、自分なりの『美女と野獣』を創りたいって思ったんだ。

知輝 それが『怪談の多い料理店』なんですね。

斉藤 そういうこと。

知輝 第二話の『トイレの鼻毛さん』は、ふざけて書いたのかと思いました。

斉藤 とんでもない。僕は笑いを意図したシーンを見ると、作者のまなざしがわかるって考えている。だから、大まじめで書いたんだ。

知輝 作者のまなざしですか。

斉藤 ある人にとっては「ハゲ」という言葉は、笑いなんだよ。だから、「ハゲ」という言葉で笑いをとろうと考えてしまう。学校現場でもそんな悲しい笑いに出合うことがある。もちろん「ハゲ」と言って人を馬鹿にする人を、今後僕が描くことはあるかもしれない。でも、僕の劇ではそのシーンが笑いに繋がることはない。

知輝 でも鼻毛の長い少女は笑いですよ。

斉藤 正直なところ、笑いとして取り上げていいかどうか迷ったんだよ。僕は熟考の末、鼻毛の長い女の子を笑いとして採用したんだ。

知輝 ハゲも鼻毛も身体に関係することですよ。ハゲは笑いにしてはだめで、鼻毛は笑いにしてもいいと考えたのはなぜですか。

斉藤 ハゲとハナゲ、一文字違いだけど、この違いが大きいんだ。ハゲのある人は好きではげている訳じゃないだろ。できればそこに毛があってほしいと思っているはずさ。そんな、人が気にしている身体的特徴を笑いにするっていうのは、弱者をいじめる笑いにつながるだろ。それじゃ、鼻毛はどうだろう。鼻毛さんは自分で鼻毛を伸ばしているんだ。切ろうと思えば切れるのに自分の意志で伸ばしているんだよ。

知輝 すごい人ですね、それ。

斉藤 人っていうより、妖怪なんだけどね。おそらく世の中に鼻毛をおしゃれって考えて伸ばしている人はいないよね。だから、同じ身体に関することでも鼻毛は笑いに使っていいって考えたんだ。

知輝 結局のところ、先生はどんな笑いが好きなんですか。

斉藤 一言で言えばナンセンスな笑いかな。

知輝 美術室で突然縄跳びを始める山姥とか。

斉藤 僕にとって、とってもわくわくする世界だね。さてと、知輝くん、見晴らしの丘に着いたよ。

◆シロツメクサ そして『魔術』

知輝 ここから七つ森全体が見渡せますね。

斉藤 ここは『魔術』の主人公、麻由美のお気に入りの場所。

知輝 この丘一面に咲いている白い花なら僕にもわかります。クローバーですよ。

斉藤 日本名は何だか知っている？

知輝 シロツメクサ。

斉藤 正解。この草、元々日本にある植物じゃないんだ。

知輝 帰化植物なんですね。なんかちょっとがっかりだな。

斉藤 なるほどね、そのがっ

かりという気持ちわかるよ。帰化植物って悪者扱いされているからね。

知輝 悪者じゃないんですか。僕、学校でそう教えてもらったんですけど。

斉藤 教師としての僕は、帰化植物＝悪のような考え方を学校に持ち込みたくないんだ。

知輝 どうしてですか。

斉藤 日本古来の生態系を守るということは必要なことなんだと思う。でもね、今の日本の学校には外国からきた生徒もたくさんいるんだよ。そんな生徒の前で日本固有の植物＝大切＝善、外国からきた植物＝大切ではない＝悪、といった提示はしたくない。外国からきた生徒はそれを自分と重ねて悲しい思いをするよ。僕はね、七つ森全体がレジャーランドになることに反対した。でもね、ここみたいに人の手が入った場所があってもいいと思う。そして、そこに帰化植物のシロツメクサがたくさん咲いていてもいいと思う。

知輝 斉藤先生はシロツメクサ、好きなんですね。

斉藤 もちろん、大好きだよ。だって宮沢賢治の『ポラーノの広場』と僕を繋げてくれる花だもの。僕は、「これは善、これは悪」と善悪を決めてしまうことが大嫌いなんだ。それは人間を描く時も同じ。僕は人間の善悪がはっきりしたドラマをつまらないと感じてしまう。だから『魔術』をそんなドラマにはしなくなかった。

知輝 どういうことですか。

斉藤 ネットいじめをした人＝悪、ネットいじめを受けた人＝善、という描き方を乗り越えた劇を創りたいと思ったんだ。もちろんネットいじめをすることは絶対許されること



ではないんだけどね。

知輝 この劇は上演時間三〇分ですよ。先生の作品としては三〇分は短くないですか。

斉藤 この作品だけだね。そういう条件で創ったから。第一回埼玉県子ども人権フォーラムのオープニングを飾る劇を上演してほしいって頼まれたんだ。テーマは「ネットいじめ」って決まっていた。

知輝 重いテーマですね。

斉藤 そうなんだ。なかなかアイデアが生まれなくて、ほんと苦しんだよ。『なっちゃんの夏』の登場人物・麻由美の物語を創ることを思いついたのが、本番のおよそ一か月前。完成は本番の十日前だった。これはいつものことなんだけどね。ただ、『魔術』を上演した二〇〇九年は新型インフルエンザが猛威をふるっていたため、いつも以上に苦しかった。当日、観客は二千人もいたんだけど、みんな感染防止のためのマスクをしているという異様な雰囲気な中での上演だった。ラストシーンで会場を満たした鼻をすする音は、インフルエンザのせいではなかったと思うけど。

知輝 『なっちゃんの夏』の麻由美さんは、笑うことができなくなった少女でしたね。

斉藤 僕は麻由美が笑うことができなくなるきっかけになった出来事を『魔術』で描いた。

知輝 『魔術』の麻由美さんは、笑顔の似合う少女だったんですね。そんな彼女の最後のセリフは「ママ、わたし、どうしたらいい？」でしたね。

斉藤 よく覚えているね。この言葉は劇中のママに投げかけられていると同時に、観客にも投げかけられているんだ。人権フォーラムでは「じゃんじゃん」という形で解決するドラマはより、観客への問いで終わるドラマの方がいいって考えたんだ。そうすることで、劇が観客の中で続いていくだろう。さて、今度はこの道を歩いていこう。

◆キビタキ、コルリ、クロツグミ、ミソサザイ、シジュウカラ、キジバト、アカハラ、アカゲラ そして『森の交響曲』

知輝 案内板に「囀りの小道」って書いてあります。

斉藤 ここからこの道の終点のじんだら沼までが、七つ森で一番多くの鳥の囀りが聞こえる場所なんだ。ほら早速聞こえてきた。知輝くん、この囀りはわかるだろう。

知輝 はい、ウグイスです。

斉藤 正解。それじゃ、そこの切り株に腰を下ろして目をつむってごらん。

知輝 聞こえます、鳥の囀り。

斉藤 何種類聞こえる？

知輝 三種類かな。

斉藤 今聞こえているのは七種類。

知輝 七種類もですか。

斉藤 キビタキ、コルリ、クロツグミ、ミソサザイ、シジュウカラ、キジバト、アカハラ
の七種類。そしてほら木を叩くこのドラムのような音、これはキツツキの仲間のアカゲラのドラミング。これを加えたら八種類だ。

知輝 まさに『森の交響曲』ですね。

斉藤 主人公・美樹の母である響子さんは、その切り株に座ってこの囀りを聞きながら作曲したんだ。

知輝 先生はどんな音楽が好きなんですか。

斉藤 そうだな、クラシックも好きだし、ジャズ、ロック、映画音楽、アニメの主題歌、フォークソングからJ-POP、それに演歌も好き。『森の交響曲』^{シンフォニー}を書いているとき一番よく聞いていたのは「おふくろさん」とグスタフ・マーラーの交響曲だった。



知輝 マーラーの交響曲のどんなところが好きなんですか。

斉藤 彼の交響曲はとにかく斬新なんだ。そして、長大でもある。第三番なんか六楽章あって演奏時間は軽く一時間を超えてしまう。そんな交響曲の影響を受けて創作したもんだから、一九九九年にこれを上演したときは途中の休憩時間も含めると上演に三時間もかかっちゃったんだ。

知輝 中学生の演劇部が三時間の劇をやったんですか。僕は今、高校の演劇部に入ってますけど、ちょっと想像できないな。

斉藤 マーラーが今までにない音楽を創ろうとしたように、この当時の僕は、誰も創ったことがない、そして僕にしか創れない劇が創りたかった。今振り返ると少し恥ずかしいんだけど、若かったからね。実は『七つ森』と『怪談の多い料理店』もこの頃生まれた作品で、最初の上演はどちらも二時間を超えていた。一つ断っておくけど、誰も創ったことのない劇って、長い劇っていうことじゃないよ。とっても話したい話題なんだけど、これを話し出すと劇より長くなっちゃうから、今日はやめとくね。

知輝 それにしても、中学生が上演する二時間以上の劇を観に来る人なんていたんですか。

斉藤 それがいたんだね。毎回千人以上の人観に来てくれた。多いときには千二百人入るホールが満員立ち見になったこともある。

知輝 今回の作品集では、三作品とも六十分以内に書き直されていますね。

斉藤 若い頃の僕と違って、今の僕は自分の作品を上演してもらうことに喜びを感じてるんだ。前作の後書きにも書いたけど、今の僕が一番興味を持っているのは教室演劇だから。

知輝 大きな心境の変化ですね。

斉藤 でもあの頃と変わらないことが一つある。

知輝 何ですか、それって。

斉藤 変わることを恐れないこと。僕は時代とともに変わることをよしとしてきた。だから変わり続けることはずっと変わっていない。

知輝 変わることが変わらない…わかる気がします。

斉藤 知輝くん、じんだら沼に着いたよ。ここでちょっと一休みしよう。

◆ウスバシロチョウ そして『とも』

知輝 (あっ)先生、蝶。

斉藤 ウスバシロチョウだね。

知輝 モンシロチョウに似て
ますね。

斉藤 (うん)でも、この蝶は
アゲハチョウの仲間なん
だ。だからウスバアゲハ
って呼ぶ人もいる。この
あたりでは春の一時期し
か見ることができない、
蝶のスプリング・エフェ
メラルなんだ。



知輝 春の^{はかな}い^{いのち}生命。

斉藤 僕はね、この蝶を見るとまるで美しい和紙が飛んでるように感じるんだ。

知輝 ほんとだ。和紙に^{いのち}生命が吹き込まれたって感じがします。

斉藤 『とも』を創りながらそんな^{いのち}生命についてずいぶん考えた。

知輝 『とも』には、『夏休み』に収録されている『降るような星空』の重要な登場人物・
勇くんの話が出てきますね。

斉藤 『とも』は『降るような星空』を書いた自分を見つめ直す作品だったからね。

知輝 どういうことですか。

斉藤 二つの作品を読み比べると、『とも』がどんな思いで創られたかわかると思うけど。
僕の答えが聞きたい？

知輝 もう一度読み比べて、自分で考えてみます。

斉藤 それがいい。

知輝 『とも』には劇中劇中劇が出てきますね。『とも』の中で紹介される『虹の彼方に』
の登場人物が上演する『サンタが町にやってくる』。

斉藤 好きなんだよね、劇の中に劇が出てくる形式が。僕は、今回の脚本集に収録した六
作品のすべてで、劇中劇の形式を何らかの形で使っている。ワンパターンと思う人も
いるかもしれないけど、僕はそうは思っていない。劇中劇ってさまざまな可能性をもっ
ていると思っている。僕はその可能性をこれからも追求したいと思ってる。

知輝 『サンタが町にやってくる』って先生が体験した話から生まれたって本当ですか。

斉藤 僕が蓮田市立黒浜中学校の演劇部顧問だった時に体験したことがもとになってるん
だ。

知輝 聞かせてくれませんか、その体験。

斉藤 わかった。そうだね、大げさに聞こえるかもしれないけど、あれは僕の人生を変え

る体験だったと思う。昭和から年号が変わった平成元年のことなんだ。演劇部に、ある難病の子ども達のためにクリスマス会で劇を上演してほしいという依頼がきた。実行委員長は高校3年生の少女だった。彼女自身が子ども達と同じ病と闘っていた。そんな彼女が、自分よりも若い子ども達のためにクリスマス会を企画したんだ。僕は胸を打たれて、その依頼を引き受けることにした。「子どもたちに、中学生のはつらつとした姿を見せてください」という彼女の希望に、ダンスと短い劇を組み合わせることにした。ただ、どんな内容の劇を創ったらいいのか、なかなかアイデアが浮かばなかった。僕は、彼女にお願いして、会に参加する子どもたちに直接会わせてもらった。そして、患者と接する時に気をつけなくてはいけないこと、介護の仕方などを教えてもらった。そして、その後、患者の親の会合にも参加させてもらった。その会合では、様々な悩みが生々しく語られていたんだ。最後に保護者の代表の方が次のような発言をした。「みなさん、信じましょう。今は、治療薬は見つかっていません。しかし、いつか必ず治療薬はできる。そう信じましょう」

この言葉が耳に残ってね。そして、治療薬＝サンタクロースという図式ができあがったんだ。僕は『サンタが町にやってくる』という劇を一気に書き上げた。劇の最後は部員全員が舞台上に登場し、「信じれば、サンタが町にやってくる」という言葉を客席に向かって叫ぶんだ。

知輝 『とも』のあのシーンですね。

斉藤 僕は上演の前日、部員全員を集めて話をした。「脚本に、サンタクロースが治療薬を意味するとは書かれていない。でも君たちはこのことを心に刻みつけて演じてほしい」と。そして、発表当日がやってきた。実は僕は本番の舞台を観ていないんだ。

知輝 (えっ) どうしてですか。

斉藤 その日は妹の結婚式だったんだよ。僕は午前中に通し練習を行い、その後、舞台道具をクリスマス会場まで運搬したところで、部員とその保護者に任せ、結婚式場へと向かったんだ。

知輝 で、どうだったんですか。

斉藤 翌日、僕はきっとすてきな報告が聞けるだろうと、わくわくしながら部活に出かけた。そして、みんなに「どうだった」って尋ねた。そしたらね、突然部員の一人が泣き出しちゃったんだ。この子はね、昨日、朝から熱っぽく体調が悪かったんだ。でもどうしても子ども達のために劇がやりたいってクリスマス会に参加したんだ。ところがね、劇の途中で頭がぼーっとして台詞が出てこなくなって、劇が止まってしまったっていうんだ。僕は本番の舞台を観ていないので、どうコメントしてよいかわからなかった。とりあえず慰めの言葉はかけたけど。何日かして、演劇部に一通の手紙が届いた。クリスマス会の実行委員長である彼女からの手紙だった。実はその手紙いつもこのカバンの中に入れてるんだ。見たい？

知輝 ぜひ。

斉藤 わかった。ほら、これがその手紙。僕はね、この手紙をみんなに読んで聞かせたんだ、こんな風に。

「毎日寒い日が続いていますが、演劇部のみなさんはお変わりなくお過ごしでしょう

か。先日のクリスマス会では大変お世話になり、どうもありがとうございました。

みなさんの演劇、ダンスは、本当にとっても素晴らしかったです。お話の内容もよく、まとまりがあって、きれいで、かわいらしいみなさんの姿を、参加者全員大人も子どもも患者さんも目をきらきら輝かせながら見て、『本当によかったね、あんなに素晴らしいダンスを見せてもらってうれしい』と大変喜んでいました。

小さい体で一生懸命踊ってきつと練習も大変だったことだと思います。勉強に忙しい時期に、私たちのために練習を積み重ねて学校がお休みなのにわざわざ来てくれて、何度お礼を言ってもいい足りないほど、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

また、何か機会がありましたら、ぜひみなさんの素晴らしいダンスを見せてください。それと当日は最後まで残ってくれた上、後片付けのお手伝いまでしていただいてどうもありがとうございました。私たちの手や足が動かないため行き届かないところを、みなさんに助けてもらってはじめて一つの素晴らしい行事をつくりあげることができるので、みなさんにはとても感謝しています。

素晴らしいダンスとお手伝いとでさぞかし疲れたことと思います。本当にありがとうございました。今年も残りわずかとなって、もうじき楽しいクリスマス、そして冬休みですね。寒さもますます厳しくなっていますので、お体にはくれぐれも気をつけて勉学に、演劇にと頑張ってください。またお会いできる日を楽しみにしています。

斉藤先生、当日お手伝いに来てくださった保護者の方々にもよろしくお伝えください」
知輝　なんか、僕まで嬉しくなっちゃいました。

斉藤　嬉しいよね。劇がうまくいかなかったと泣いた彼女が読んでいる途中で泣き出してね。そして、その涙は静かに静かにさざ波のように伝わっていった。人のあたたかいところに触れた時に流れる涙って言ったらいいのかな。僕は心あたたまる思いとともに、劇を上演しその後片付けを手伝った部員達を誇らしく思う気持ちでいっぱいになった。本当にすてきなひとときだった。思い出の中でもとびきりの宝物だね。

知輝　話は変わりますが、斉藤先生はからだが強かったそうですね。

斉藤　生まれた時の体重、九六〇グラムしかなかったんだって。そんなこともあってよく風邪を引いてね。小学一年生の時は七十日近く休んだ。二年生の時は夏休みから九月半ばまでずっと家から出られなかった。

知輝　ずっと家にばかりいたのに生き物が好きになったんですね。

斉藤　ずっと家にばかりいたから生き物が好きになったとも言えるかな。僕の愛読書、何だったと思う。

知輝　何だったんですか？

斉藤　昆虫図鑑とファーブル昆虫記。「虫博士」ってあだ名がつくほど昆虫が好きだった。

知輝　今の子どもは図鑑ばかりで生の自然を知らないなんてよく言われますよね。

斉藤　僕は図鑑ばかりでもいいと思うんだ。だって僕もそうだったから。人生のどこかで図鑑と生の自然がリンクするかもしれないじゃないか。正直言って、僕が小学生だった四十年以上前、僕のまわりの子ども達が生の自然をよく知っていたっていう記憶はないんだよね。僕は、現在僕と劇を創っている演劇部員の方が、四十年以上前に僕のま

わりにいた田舎の子ども達より、ずっと自然に興味を持っているって思ってる。ずっと自然に親しんでいるって自信を持って言える。

知輝 ところで、先生にとって病気がちだったことはよかったですか。

斉藤 今になってみれば、そうなのかもね。病気と無縁だったら『とも』は生まれなかったと思うし。

★エピローグ

知輝 先生、ここに咲いている茶色の地味な花は何ですか。

斉藤 これ…

知輝 どうしたんですか。

斉藤 オキナグサ…

知輝 それ知ってます。宮澤賢治の童話で読みました。これがその花なんですね。

斉藤 これもスプリング・エフェメラルの仲間なんだ。花が大好きな僕でも、野生の状態
で咲いているオキナグサに出会うのはこれが二回目。七つ森でははじめてだ。

知輝 それじゃみんなに知らせなくっちゃいけませんね。

斉藤 知輝くん、だめだよ。そんなことしたらあっという間に盗掘されちゃう。この花は
二人だけの秘密にしよう。

知輝 先生、どうしても教えてあげたい人が一人いるんですけど。

斉藤 わかった。智花さんならいいよ。それにしてもとびきりのスプリング・エフェメラルに出合っちゃったな。

知輝 スプリング・エフェメラル、春の^{はかな}い_{いのち}の生命。

斉藤 君と僕が取り組んでいる中学生の演劇も、スプリング・エフェメラルのようなものかもしれないね。ずっと取り組んできた劇は、ひとときの上演で輝きそして消えていく。

知輝 でも一回きりの儂いものだからこそ、心に残り続けるのかな。

斉藤 そうかもしれないね。

知輝 先生の新しいスプリング・エフェメラル、楽しみにしています。

斉藤 (あっ)知輝くん。ほら、目の前のあの枝。

茶色い鳥がとまっているだろ。あの鳥何だかわかる？あれ、オオルリの雌なんだ。雄と色が全然違うから違う種類の鳥みたいだろ。ほら、雄が隣に飛んできた。この雄の青といったら、今まで見たどんなオオルリよりも青い気がする。それにしてもきれいな青だ。知輝くんもそう思うだろ。あれ、知輝くん、知輝くん、どこに行ったんだ。



そうか、そういうことか。やられたよ。見事にだまされた。でも、楽しかった。今年も七つ森に戻ってきたんだね。今年も彼女を連れて。君のおかげで、七つ森をレジューランドにする計画は中止になったよ。これから彼女に、僕と一緒に歩いた道を案内してあげるといい。そして七つ森の生き物を彼女に紹介してあげるといい。きっと彼女、喜ぶよ。そうだ、後書きに今日のことを書こう。七つ森の生き物を語りながら、僕の思いも書いていこう。タイトルは『七つ森・いきものがたり』。また君に助けられちゃったね。ありがとう。本当にありがとう。ルリ。